

北海道の春は遅く、だが一気に来ると言われる。確かに、雪解けの茶色の世界がみるみる淡い緑色でおおわれ、やがてその間に鮮やかな黄や白や赤い色が混じり始める五月は北国に春が来たと言うふうにふさわしい。

ただ、ここで暮らしていると春はもつと早くからやってきていると思うところがある。例えばフキノトウだ。まだ雪がうっすら残っているところにグツと顔を出す。あの独特の味と香りも合わせて春の訪れを感じさせる。ところが、よく観察しているとあのフキノトウの姿はすでに晩秋に見られるのだ。その時にはすでにフキノトウの形になっていて、そのあと深い深い雪の下に埋もれながらじいっと雪解けを待っているのだ。そういえば木々も冬芽のかたちで春を待っている。冬芽は春になって枝や葉や花になるものが硬い鱗のような殻のなかにギュッとつまっている。その状態で厳しい冬の間にじつと時が来るのを待っているのだ。空気中の水分が氷の結晶となって冬芽にまとわりついているのを目にすると早く暖かい日差しが来るように応援したくなる。

冬の間の太陽は、どんよりとした雲に覆われることが多いこともあるが、夏のあの生氣は消え失せ、弱々しく感じられる。そんな冬の太陽に力が戻って来たと感じるのは二月である。これはまったく感覚的なものだが、妻もそういう。そもそも、北国のここでは十二月、一月と朝七時になっても陽は登って来ないし、夕方四時半を待たずに陽は沈んでしまう。それが、二月になると日の出は六時台になり、二月の半ばには日の入りも五時過ぎになる。そこから日照時間もぐんぐん長くなる。太陽が南に来た時の角度も冬至の頃は二十四度台だったのが二月になると三十度まで高くなる。この南中の時の太陽高度は冬至前後の角度の上昇は鈍く、二月前後頃からぐんぐん上昇し始める。そんなこともあって二月になると太陽が戻って来たという感覚になるのかもしれない。それに気のせいか、その頃になると鳥たちの鳴き声も力強くなる。長い冬から抜けて春が始まったと感じるのは私たちも鳥たちも二月からということだ。それだから二月の湿った雪の除雪も耐えられるのかもしれない。

我が家のメインの屋根は非常に緩い勾配にしてあるので、冬の間、ほぼ屋根に雪は積もったままになる。それが三月の半ばにもなると厚く積もった屋根の雪も徐々に落ち始め、太陽の熱も加わりどんどん少なくなってくる。三月下旬になると、敷地の雪原にところどころ窪みが見られるようになる。最も早く見られるのは南向きの斜面の木の根元だ。太陽の光を浴びた木の体温が木の周りの雪を溶かすのだ。それから平坦なところにも大きな窪みが現れる。池や川の間所だ。冬の間、池の表面は氷に覆われ、その上に厚く雪が積もっているのだが、深く掘ったところは下に水が残っている。そこに、徐々に解けた雪が水となつて川に集まり流れをつくってくる。そうなると表面を覆っていた氷も解け、その上の雪も他より早いスピードで解けてくるのだ。この頃になると、やることも除雪から、雪解け前にやっておかなければならない作業が変わってくる。冬の間には雪で折れてしまった枝の整理だ。

